

「着物と装身具に見る江戸のいい女・いい男」展の中から、一部の作品をご紹介します。

## 女性の着物と装身具

Photo. 01



### 業平菱に杜若冠文様打掛

〈なりひらびしにかきつばたこうぶりもんよううちかけ〉

綸子(りんず)地 摺匹田、刺繍、金刺繍

江戸後期 寸法：身丈 163.5×桁 61.3cm

白綸子地に有職(ゆうそく)文様の三重襷(みえだすき)、杜若、公家の冠(こうぶり)などをあらわした振袖。中綿が多く、打掛として着用されたと考えられる。

Photo. 02



### 松竹梅鶴亀高砂文様振袖

〈しょうちくばいつるかめたかさごもんようふりそで〉

縹子(しゆす)地 刺繍、銀刺繍

江戸後期～明治初期 寸法：身丈 158.0×桁 62cm

緑色縹子地に銀糸入りの刺繍で松、紅白の梅、竹と舞鶴、養亀をあらわした振袖。裾には謡曲『高砂』にちなむ散り松葉と熊手、帯も刺繍されている。

Photo. 03



### 赤羅紗地蝶文様錦糸管迫

〈あからしやぢちょうもんようきんしほこせこ〉

江戸末期 寸法：縦 9.5×横 14.0cm

管迫は、江戸時代中期頃より発達した女性用の装身具。御殿女中や武家中流以上の婦人が、紙入れとして使用し、多くは豪華な装飾や細工が施されていて、中に懐紙、葉、楊枝、櫛、鏡、小銭等を入れて携帯した。

Photo. 04



### 綴織鶴文守り巾着

〈つづれおりつるもんまもりきんちゃく〉

明治末～大正 寸法：縦 10.5×横 11.0cm

守り巾着は、お守り入れとして江戸中期ころから江戸で流行り、その後、全国的に広まったといわれる。現代でも七五三の祝いに際して子どもが、こうした守り巾着を身につける風習は見られる。

## 男性の着物と装身具

Photo. 05



### 八丈縞八端地羽織

〈はちじょうじまはったんじはおり〉

綾地縞織（八丈縞）、縹珍地

江戸後期 寸法：身丈101.5×衿68.9cm

八端と通称される綾織（あやおり）八丈縞の羽織。裏地も細かな文様の縹珍（しゅちん）を用い、紐は太い平組紐で先がぼたん掛けと凝った仕立てである。八丈縞は現在の東京都八丈島で織られた絹織物で、島の植物や泥で染めた黄色、樺（鶯）色、黒の深く渋い色調が特徴的である。

Photo. 06



### 黄色呉呂地丸に横木瓜紋陣羽織

〈きいろごろじまるによこもっこうもんじんばおり〉

毛織物地（呉呂）、木綿地（更紗）等

江戸後期 寸法：身丈 89.5×半肩幅 29.3 cm

陣羽織は武将、上級武士においては陣中の礼服と位置づけられ江戸時代を通し制作された。桃山、江戸初期の武将の陣羽織には大胆奇抜な意匠がみられた。本作のような袖無し、返し襟、前に下がった太刀受の形式は幕末期の陣羽織の典型である。

※本展では、着物を 35 点展示する予定ですが、会期中に一部展示替えを行います。リリースに掲載している着物（Photo01, 02, 05, 06）については、4 点とも全期間展示します。

Photo. 07



### 相良縫竹林七賢人象牙象嵌紙入れ

〈さがらぬいちくりんのしちけんじんぞうげぞうがんかみいれ〉

江戸中期 寸法：縦 12.5×横 18.0cm

紙入れは、「鼻紙入れ」とも呼ばれ、外出時に必要な小間物を入れて携帯した。これは、相良刺繍（さがらししゅう）とも呼ばれる相良縫の技法で作られたもの。三つ折り、または二つ折りの形態をしたものが多く、鼻紙や薬、小楊枝などのほか、金銭も入れた袋物である。

Photo. 08



### 花文刻印手金唐革腰差したばこ入れ

〈はなもんこくいんできんからかわこしざしたばこいれ〉

明治～大正 寸法：呎の部分 縦 7.3×横 12.2cm

刻みたばこを入れる呎（かます）の部分は、オランダから輸入した金唐革を用いており、きせるを入れる筒の部分は籐（とう）の網代編みで作られている。緒締は、珊瑚。前金具は、金工家の桂光春によって浅草寺の風景が彫られている。